

エンパワメント型アーツセラピーのセルフアセスメントの実用化にむけて エンパワーする人をエンパワーするために

著者	石原 みどり, 小村 みち, 林 章浩, 兼子 一
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	24
ページ	1-21
発行年	2023-03-20
URL	http://doi.org/10.14990/00004546

エンパワメント型アーツセラピーの セルフアセスメントの実用化にむけて —エンパワーする人をエンパワーするために—

石原みどり・小村みち・林章浩・兼子一

はじめに

甲南大学人間科学研究所（以下 KIHS）のパイロットの調査研究（2008-11）および、兼子を代表とする研究チーム（以下 ATAS）⁽¹⁾の全国実態調査（2012-14）により、エンパワメントを主目的としたアーツセラピー⁽²⁾の有意義性と特徴、課題が示された⁽³⁾。エンパワメント型アーツセラピー（Empowerment Arts Therapy, 以下 EAT）は日常の地域社会に根差しながら、健康度の高い人・未病の人・寛解期の人などを対象に、様々なかたちで展開している。しかし EAT には明確な枠組や公的制度がなく、自由で任意に行われる活動であるがゆえの問題もある。KIHS 紀要 vol. 20（2019）所収の論文では EAT の課題を次の 4 点にまとめている。

- (1) 方法、内容、および質の点で千差万別の「なんだかよくわからない」アーツセラピーを、その実態に即して明確にし、分類・整理して特徴づける。
- (2) 社会的に位置づけ、社会的認知を得られるようにする。
- (3) 活動内容や質に見合った適切な評価を行えるようにする。
- (4) 評価内容が活動に反映され、安全で、より質が高い活動へとつながるようにする。

Vol. 20 では課題（1）（2）を掲げた意義と目的を再確認し、分類作業をさらに進展させた（後掲の図 2，3 を参照）。また課題（3）（4）については ATAS 第 2 期研究プロジェクト（2015-17）⁽⁴⁾で着手しており、第 1 期の調査協力者（EAT 実践者）達にヒアリングしながら EAT の構成要件を検討し、7 カテゴリー-23 要件を策定した。構成要件は、EAT 4 系統の分類方法およびその呼称と同様、実態に合わせ随時改訂され、現在は 8 カテゴリー-26 要件となっている（後掲の表 2）。しかし一つの系統ですら活動方法も内容も多様であり、そこに一律的基準を適用することは、むしろ自由で創造的な活動を妨げる「余計なお世話」になりかねない。また、そもそも誰が適切に評価できるのか、どこまで客観性が求められるの

かという問題もある。喫緊の課題は、個々の EAT 実践者の足場が堅固になり、活動の質を高めつつ持続可能となること、対象者の心身の安全性が確保されることであり、この目的に立ち返れば、構成要件について実践者自身が自己評価・自己分析し、活動にフィードバックする「セルフアセスメント」のほうが実践的で即効力を持つ、と考えを改めた。

そこで第 2 期終盤において評価方法をセルフアセスメント方式に変更し、それを手に取りやすいハンドブック形式で普及させるという構想を打ち出した。セルフアセスメントは、構成要件を評価観点とし、5 段階で自分の現状を判断する方法である。手始めに β 版ハンドブックを作成し、前半に EAT の解説（研究概要）、後半にセルフアセスメント（ β 版では「自己評価」）ツールを配し、その後ろに各要件についての解説をつけ、要件の設定意図が伝わるようにした。 β 版ハンドブックについて EAT 実践者達にヒアリングを行った結果、好反応を得ることができ（表 1）、また関連学会での発表では、構成要件の内容に関しての異論は聞かれなかった⁽⁵⁾。これらより、セルフアセスメント方式とハンドブック形式の有効性と可能性をさらに追求すべきであると判断した。今後、ハンドブックのリリースに向け、さらに構成要件の十全性を検証すること、また構成要件を活用したセルフアセスメントを実効力のあるシステムとして具体化し、その有効性を検証することが必要である。

本稿はこの検証作業に向けた準備となる。第 1 節では、EAT の構成要件の策定と、セルフアセスメントのシステムづくりのプロセスを確認し、第 2 節において構成要件 8 カテゴリー 26 要件について策定ポイントを解説する。続く第 3 節において、構成要件をアセスメントシートとして活用する際の課題点を見、その解決策を検討する。最後、第 4 節にて、前節で検討した策定プロセスの実効性、セルフアセスメントの有効性についての予備調査の事例を報告し、今後の本調査の足がかりとする。

1. プロジェクトの進め方

1.1. EAT 実践者と協働する

EAT と PAT（精神病理学的アーツセラピー：Psychopathological Arts Therapy）は、ともに、アートがもつセラピー機能を活用する点では共通する。しかし、両者は目的も対象者も異にしており、PAT が医療制度・資格制度に則っているのに対して、EAT には全体を指揮したり評価したりする統括的機関はない。EAT 実践者は依拠する基盤がないなか、手探りしながら知識や技術を得て活動を展開させている—つまり、孤立し独善的になるリスクもある（表 1-①参照）。明確な

表1 β版ハンドブックに対するEAT実践者の見解
(E-メールによるアンケート調査, 2016年10月実施, 被験者数10名)

<p>① <u>独善的になりがちな自分達の活動を客観的に見直せ</u>, <u>自己研鑽に役立つツール</u>である。 (ことば音楽療法士・40代・女性)</p>
<p>② まだまだ日本では認知度の低いアートセラピーがこれからきちんと地位を確立するために必要なことが書かれていると思う。ワークのメニューの見直しを検討していたところで、参考になる事柄がたくさんあった。(フォトセラピスト・40代・女性)</p>
<p>③ アートセラピーを提供する側の自己評価はとても重要なものである…。海外と日本国内のセラピストの資格・責任や役割が違うということからもエンパワメント型という表現はとても便利なカテゴリーであると考え。(…)<u>何がカラーセラピーなのか, 何を目的とするのかという定義も明らかにできない状況では話し合いは難しい。お互い(セラピスト同士)批判や否定を恐れて様子を見合うような関係ではなくなるよう, 中立的なプロバイダーの存在が重要である。…エンパワメント型アートセラピーが全国のアートセラピストをつなげるきっかけとなればと期待している。</u> (カラーセラピスト・40代・男性)</p>
<p>④ 自己評価の活用法について、<u>定期的</u>に実施をすれば前回と見比べ、経過を追い、活動内容の変更や転機を迎えることができと思うが、「やりっぱなし」となると、自分を知る機会が減るためもったいない。セラピストとして、複数人で実施している場合は、自己評価と他者評価の見解の違いや、それによるアドバイスをもらえる事で、<u>スーパーバイズ/フィードバック</u>としても使用できと思う。 (音楽療法士(病院勤務)・30代・女性)</p>
<p>⑤ レーダーチャートで可視化できるので、<u>自分の弱点や盲点, 改善すべきポイント</u>がわかりやすい。今後さらに詳細化されるとのことで、多くの人に使用されると思う。 (アートセラピスト・40代・女性)</p>

定義がないがゆえに認知されづらいエンパワメント志向のアーツセラピーが、対他の認知と理解を得るためにも、また対自的に自覚と自信を持つためにも、EATを構成する要素、要件を解明する意義がある。重要なのは、この構成要件が、活動の内実に沿って求められねばならないことである。つまり、心理職や対人援助職の構成要件・資格要件を参照はしても、それに準拠するのではなく、また、多種多様なEATの現場を見ていない各分野の専門家から与えられるのではない。とはいえ個々に独立して活動しているEATの実践者や民間組織が、全体で共有しうる構成要件を中立的な立場から明らかにすることは不可能といえる。そこで我々のような第三者が有用となる。我々研究者はいずれかの立場に与することなく各分野のEAT実践者らと協働し、EAT活動全体に目配せしつつ、可能な限りあらゆる活動を包摂するように作業を推進できる。また仲介役として実践者同士をつないだり、有益な情報を提供したりすることもできる。EAT実践者からもそのような期待が述べられている(表1-③参照)。つまり我々のような第

三者は裁定者や巡視者ではなく、他者をエンパワーする実践者をエンパワーする者といえよう。

このように、本プロジェクトは第三者（研究者）が実践者達と協働しながらEATに必要な要件を策定し、この構成要件を活用した質向上のシステムを構築する。それを実践で運用してもらい、使い勝手や実効性について検証およびフィードバックしながら改定と改築を行う。すなわち「策定・構築－運用－検証－フィードバック－改定・改築」という循環プロセスである。こうした進め方の妥当性と実行可能性については、「参加型評価（participatory evaluation）」の議論と実践から学ぶところが大きい。

1.2. 参加型評価に学ぶ

参加型評価とは、教育、福祉、医療、地域活動等での各プロジェクトについて、実行スタッフ、受益者など利害関係者がそれぞれの立場・文脈から協働的にプロジェクトを評価するものである。1990年代からアメリカを中心に発達し世界各国へ広がっている。考え方や形態によって、協働型（collaborative）評価、エンパワメント（empowerment）評価、クライアント中心（client-centered）評価などが展開している⁽⁶⁾。ここでは全体を代表する参加型評価が発達してきた背景と、いくつかの特徴を簡単に見ておきたい。

プログラム評価は1960年代アメリカで一つの学問分野として発達し、社会政策や行政活動に欠かせないものとなっていった⁽⁷⁾。評価方法の主流は、外部（資金提供者から委託された専門の評価者）が作成した評価尺度による定量的・定性的検証であるが、この従来型評価が事業やプロジェクトのプログラム改善にとっては十分機能しないことが気づかれ始めた。そのなかで登場したのが参加型評価である。両者の大きな違いは、従来型評価が外部指向で客観性・中立性・正確性を重視し、事後の評価結果によって成果を判断し次の政策に反映させていくのに対し、参加型評価はプログラムの利害関係者が評価者となり、主体性・能動性を高めつつ、プログラム実施中に継続的に評価し、改善させていく点である。参加型評価によってプログラム改善が図られ、成果があがっている海外の事例は多数報告されており、日本では2000年代より導入され始め、研究および適用の促進がなされつつある。

参加型評価の考え方として我々が学ぶべきは次の3点である。

- (1) 当事者に主権があり、当事者によるプログラムの評価・分析によって進行中のプログラムが改善され、よりよい結果につながる。
- (2) 外部評価者の役割は、当事者が評価能力を高められるようエンパワーし、評価と改善が実行できるように促進することである。評価者は、従来のような

査定者でなく、ファシリテーターであり、その意識を持たねばならない。

- (3) 従来型と参加型それぞれに長所短所がある。双方の特徴を理解し、それぞれの利点を相補的に組み合わせることによって、よりよい評価のあり方を構築していくことが望まれる⁽⁸⁾。

まず、(1) (2) の考え方に倣って、本プロジェクトは「主体はEAT実践者であり、実践者がEAT活動に合った構成要件とアセスメントのあり方を決め、よりよい結果を目指していく。我々はファシリテート、仲介、エンパワーする役割を担うものである」と表明したい。それと同時に、(3) に基づき、循環プロセスと並行して、EATのセルフアセスメントの有効性をデータとして客観的に提示する必要性を確認しておきたい。

2. EATの構成要件

2.1. 4グループ8カテゴリ-26項目

構成要件として当初策定した7カテゴリ-23要件を、セルフアセスメントのツールとして機能するように見出しや言い回し、順番等を再検討し、また一つの項目に複数の要素が入らないよう分割等を行った。基本的な内容に変更はない。検討後は8カテゴリ-26項目となり、さらに新たに8カテゴリを4グループ(I~IV)へと整理した。しかし1グループに1カテゴリしかない場合もあり、形式の点でも内容の点でも現状が最良とは言えず、あくまで暫定的なものとして提示する(表2)。

2.2. EAT構成要件の策定ポイントと特徴

次にEAT構成要件の策定ポイントと特徴を見ていこう。

(1) 判断基準は自己裁量に任されている

要件の大半を占めるグループI「知識と技術・技能」、II「実践」を見ると、I-①~⑤(⑥)は専門職の要件に類似し、I-⑦およびII-⑨~⑰は、他者の精神面・心理面に大なり小なり働きかけながらエンパワーする点で、心理職および対人援助職のそれに類似している。しかし、専門職にはそれぞれ明確な目的があり、求められる知識・技術の内容およびレベルも規定されているのに対し、EATにおけるエンパワメントのあり方は多様であり、求められる内容もレベルも個々に異なる。PATのように、一定の期間、一定の範囲、一定の評価基準(患者の病態の改善度)などの枠組がない。対象者の状態も目指す方向性も千差万別で、何をもって良好な変化であるか一律に決められない。また、一回ごとに対象者の顔ぶれが異なるような活動もある。つまり、EATでは各要件がそれぞれどのレ

表2 EATの構成要件(2022改訂)

I 準備・態勢
<p>1 アーツセラピーの知識・セッションの技術</p> <p>①アート(表現すること)が有するセラピー効果, セラピー機能について理解し, 説明できる。</p> <p>②目的・ねらいに応じたアーツセラピーおよびアートの知識・技術を有している。</p> <p>③アーツセラピーの歴史や, 自分の専門領域以外のアーツセラピーの技法・特徴について知っている。</p> <p>④自分の活動において必要なレベルの心理療法や精神療法, 心理カウンセリングに関する知識・技術がある。</p>
<p>2 自己研鑽・自己理解</p> <p>⑤活動に必要な専門的あるいは関連する知識・技術の向上を図っている。</p> <p>⑥自己評価を行っている。</p> <p>⑦自己の本質や性向を理解・把握し, 自分が抱える心理的な問題については一定の整理や解決がついている。</p>
II 実践
<p>3 ワーク・セッションの展開</p> <p>⑧自己の活動の目的・ねらい, 対象者(相手・クライアント)が明確である。</p> <p>⑨対象者の状況・ニーズに応じて目標を設定し, ワークやセッションを組み立てることができる。</p> <p>⑩対象者の様子や状態に対し臨機応変にワークやセッションを進めることができる。 (必要な場合は変更や中断もする。)</p> <p>⑪ワークやセッションの効果について計り, フィードバックしている。</p>
<p>4 対象者へのアプローチ</p> <p>⑫対象者との心理的距離を考慮し, 適切な関係を構築することができる。</p> <p>⑬対象者を多角的に理解するよう努めている。</p> <p>⑭対象者が置かれている家庭環境, 社会的環境, それに関係する制度・組織・サービスなどについての情報を得るようにしている。</p>
<p>5 安全対策</p> <p>⑮対象者の個人情報や発言内容に関して守秘義務を守っている。</p> <p>⑯グループでのワークやセッションにおいて, 参加者の個人情報や発言内容に関して, 守秘義務を守ってもらうよう確認している。</p> <p>⑰対象者の心理状態や心理的变化に対し, 必要があれば個別にフォローしている。</p>
<p>6 情報・ネットワーク</p> <p>⑱スーパーバイザーなど指導者あるいは相談できる人がいる。</p> <p>⑲対象者の状態やケースの状況に応じて適切な専門家や専門機関につなぐことができる。</p> <p>⑳アーツセラピーや自身の活動に関連する情報・知識を得るためのネットワークを築いている。</p>
III 運営方針
<p>7 経営・マネジメント</p> <p>㉑活動計画・収支計画を立て, 継続的に活動を行っている。または, それを目指している。</p> <p>㉒活動内容に見合う対価・報酬を受け取っている。</p> <p>㉓活動に係る経費は, 活動の対価・報酬や助成金等で賄っており, 持ち出しに頼っていない。</p>
IV 基本理念・ミッション
<p>8 アーツセラピーの本質・理念の追求</p> <p>㉔活動の基本理念や目指す理想が明確になっており, 他者に説明できる。</p> <p>㉕自分のアーツセラピー活動の特徴が明確になっており, 他者に説明できる。</p> <p>㉖アート(表現すること)の本質を追究する姿勢を持っている。</p>

ベルまで満たしているべきかの判断が、実践者個人の裁量に任されている。このことを、Ⅰ-②「目的・ねらいに応じた」や、④「自分の活動において必要なレベルの」、⑤「活動に必要な」といった表現で示している。

(2) 活動目的の明確化が必須である

EATが自己裁量での活動であるがゆえに、目的・ねらいを明確化し、把握しておくことが必須である。そこで、Ⅱ-⑧、Ⅳ「基本理念・ミッション」-②⑤などによって、明確化作業を具体的に行えるように設計している。たとえば、いくら真摯な気持ちで活動していても、「誰かの心のケアをしたい」「学んだノウハウを活かしたい」「自分が持てるアートの技術を役立てたい」という気持ちが上回れば、知識や技法を使うことが目的化し本末転倒となる。それは、対象者を無闇に不安な状態に置いたり、実践者自身を負の感情やストレスに過剰に晒したりすることにつながる。こうした危険性についてはこれまでも指摘し、本稿で扱った事例でも経験談として述べられたところである。それゆえ、Ⅱ-4「対象者へのアプローチ」として対象者に焦点をあてたカテゴリーを設けている。

(3) 対象者も重要であるが自己自身も重要である

他者のエンパワメントにおいては対象者の心身が第一となるが、一方で、他者と向き合うためには、まず自己自身を知ること、自己の心身を健康な状態に保つことを意識し実行できなければならない。そのためには、相応の対策と判断能力が必要である。援助職や心理職では、この点について必須事項として時間をかけて学ばれる⁽⁹⁾。被雇用者の場合は職場における研修などサポート体制も取られているだろう。しかしEATは自己責任において体制を整えねばならない。Ⅱ-5「安全対策」、Ⅱ-6「情報・ネットワーク」ではその体制状況を問うている。

(4) 持続可能性の追求は社会的責任である

EATの活動形態の多くがボランティアベースの個人活動である。全国実態調査で我々が目撃したのは、実践者の多くが、アーツセラピーの機能的価値と社会的必要性に気づき、「やらずにはいられない」という内的動機から活動を始めた、あるいはアーツセラピーという概念は念頭になくいつの間にかEAT的活動をしていた、そして採算性は二の次となっている、という実態である。必要経費まで持ち出しに頼る状況が続けば経済面で活動の継続が困難となるのは必至である。しかし、EAT活動のみによって生計を維持するのは困難であるにしても、必要経費および活動に見合う対価を得る努力をして活動を持続させることは可能である。

持続可能性の追求は、EATの実践者が安定して活動するためにも、EATの社会的価値を高めるためにも必要である。もちろん、市井のEAT活動は誰かに強制されるものでなく、それぞれのライフスタイルや価値観に合わせた自発的なも

のではある。しかし、「できる時に気が向いたらやる」「無償のボランティアだから継続の義務はない」といった意識では、対象者に対する責任性が希薄になり、自分本位の自己満足の活動に陥る危険性がある。EATが他者に働きかけ、他者に作用を及ぼす営みである以上、社会的責務としても持続性が求められる。このような活動の経営・マネジメントについての要件は、EATに限らず、社会活動全般にとって重要といえよう。本研究では一つでも多く持続可能モデルを提示できるように探索している。

(5) アートという道具をよりよく知り深めることも大切である

EATの目的はエンパワメントであり、そのための道具が様々なアートである。どのジャンルであれアートは多面的、多層的で、様々な展開の可能性を持っている。アートの本質を考え、可能性を追求することで活動の質や幅が変わってくる。この点をⅣ「基本理念・ミッション」や、Ⅱ-⑩などで問い、アートとは何かについての省察を促している。

目的と道具の関係を、他者の心身を満たすため（目的）に作る料理（道具）の関係になぞらえると理解しやすい。料理にも様々なジャンルがあり、ひと皿を成り立たせる要素は一素材、栄養価、調理法、調理器具、器、場所や湿温度などの環境、産地情報や蘊蓄等々一多数ある。いずれの要素にも多くの選択肢や考え方があり、諸要素の組み合わせは無限といえる。かつ、他者がその時に何を求めているか、その時に何を消化し吸収できるかも重要である。ひょっとするとカップ麺がよい場合もある。お湯を注ぐだけの行為に料理の要素は限りなく少ないが、要は料理（道具）の本質をどのように捉え何をどのように提供するか、できるかである。それはアーツセラピーも同様である。

以上5点にわたって述べたが、通底する策定ポイント、ねらいは、①EAT実践者が客観的視点に立って多面的に自己の活動を振り返り、評価・分析することによって、自分の立ち位置・能力・活動への姿勢を認識すること、そして、②それらを明示できるようになっておくことである。それがあって初めて、不足部分や改善すべき点への気づき、活動へのフィードバック、そして自信と確信をもった活動の展開が可能となる。

EATの構成要件はまた、これからアーツセラピーの知識や技術を獲得する人や、いま獲得しつつある人にも役立つと考える。たとえば、教本にしる養成講座にしる、それがどのような観点から教示されているのかが分かれば理解も進むだろう。あるいは並んでいる項目や教示内容、修得に必要なとされる時間、求められるレベルが十分なのか、適切なかを判断したり検討したりしながら学ぶことができるだろう。

3. EAT セルフアセスメントツールの設計

第1, 2節での説明によってセルフアセスメントの意義と目的は明確になったが、現状のアセスメントシート(図1)では、目的が達成できるようなツールとはなっていない。EAT実践者は、確かに各項目内容に照らし活動の来歴や現状を振り返ることができ、活動の改良につながることも期待できる。しかし、その際に求められる「客観的視点」が曖昧に過ぎ、また5段階で数値化を測る際の判断基準が不明である。つまり、アセスメント能力の個人差が反映され、得られた結果には主観的要素が多分に含まれることとなる。また、スコアが低かった項目について、実践者が具体的にどのような改善を図ればよいか、次の段階としてどのような状態を目指せばよいかが掴みにくい。

I 準備・態勢			
1 アーツセラピーの知識・セッションの技術		自己評点	平均値
①	アート(表現すること)が有するセラピー効果、セラピー機能について理解し、説明できる。	1・2・3・4	①～④の 合計点
②	目的・ねらいに応じたアーツセラピーおよびアートの知識・技術を有している。	1・2・3・4	
③	アーツセラピーの歴史や、自分の専門領域以外のアーツセラピーの技法・特徴について知っている。	1・2・3・4	
④	自分の活動において必要なレベルの心理療法や精神療法、心理カウンセリングに関する知識・技術がある。	1・2・3・4	平均値
2 自己研鑽・自己理解			
⑤	活動に必要な専門的あるいは関連する知識・技術の向上を図っている。	1・2・3・4	⑤～⑦の 合計点

図1 EATアセスメントシート(部分)

そこでこれらの課題の解決するため、「ルーブリック(rubric)」の考え方・評価方法導入の可能性と課題を検討する。

3.1. ルーブリックとは

ルーブリックは、学習目的の到達度を示す基本要素として、課題(テーマ)のもと、評価尺度(達成度・評価点)、評価観点(具体的なスキルや知識)、評価基準(各項目の各尺度で求められる具体的なパフォーマンス)を一覧表にした記述形式である⁽¹⁰⁾。近年、日本の教育現場において、双方向的な評価や形成的評価を目的として、ルーブリックの導入が進んでいる。その背景として、一方向的な受け身の学習法に対し、学習者が主体となり能動的に学ぶアクティブラーニングが重視され出し、とりわけ2010年代、大学教育を手初めに、高校、小中学校にお

いて取り組まれるようになったことが指摘できる。アクティブラーニングではディスカッションや体験・実演などが学習方法となり、最終的な成果だけでなく、学習プロセスも評価の対象となる。何がどう評価されるか曖昧なため、評価基準を明確にしておく必要がある。かつ、学習者の主体性を高めるため、本人が具体的に何をすべきかを把握し、どれだけ達成できているか随時判断できるよう「自己評価」も重視する。そこで有効な評価ツールがルーブリックである⁽¹¹⁾。

教育におけるルーブリック活用のメリットは、大きく3点にまとめられる。

- (1) 評価者、学習者の二者間で明確な学習目標や評価指標の共有できる。
- (2) 的確で迅速にフィードバックできる。
- (3) 学習者の自己評価によって自律性と学習意欲、メタ認知力が向上する。

このようなルーブリックは、教育現場のみならず企業の社員育成現場でも活用されつつあるが、EATなどの社会活動の改善に資する可能性も内包している。各要件について具体的なあり方を示すことでEAT実践者間に共通の判断基準によるアセスメントが可能となり、また自分の視点を離れて第三者的に振り返るメタ認知力、アセスメント能力も高まることが期待される。

3.2. EAT ルーブリックの作成と使い方

標準的なルーブリックは、明瞭かつ双方向的な評価方法として機能するように、課題（テーマ）は具体的かつ個別的であり、評価尺度が3～5段階、評価観点が4～6項目で構成されている。それにしたがえばEATの構成要件をカテゴリーに分け、それぞれにルーブリックを作成することになるが、それでは、26項目の評価観点を羅列するのと変わらない。ひとまず現在のアセスメントシートを基に標準的なルーブリックの構成に落としこみ、どのように活用できるか検討したい（表3）。

評価尺度はアセスメントシートで設定した5段階ではなく1～4の4段階とした。評価観点については8つのカテゴリーを一つ減らし、かつ重要なポイントを網羅するよう表3のように7項目に組み直した。それゆえ7つの評価観点がアセスメントシートのカテゴリーと対応していない部分が生じている。また、アセスメントシートに比べると抽象的な内容になっている。しかし要点を一覧できるルーブリック形式によって、EATに必要な評価観点を把握し、概括的に自己の活動を点検することができるのではないかと考えられる。

ただし、ルーブリック形式をとることで懸念される点も押さえておく必要がある。通常のルーブリックは達成度（成績評価点）が高いほどよい。一方、第2節で述べたとおり、EAT活動は個々に求められているレベルが異なり、落第点や

表 3 EAT ループリック

	1	2	3	4
知識	知識は部分的、断片的であり、体系的に学んだことがない。	ひとつとおりの知識を学んでいる。	自分の主たる実践領域に關する十分な知識があり、それらについて他者に説明することができる。	自分の実践領域と関連する諸領域に精通しており、アーツセラピー全般に關しても体系的な知識を持ち、それらを他者に説明することができる。
スキル	実践経験がほとんどない、もしくはごく少ない。	習得した方法に基づいて、ひとつとおりのEATを実践することができる。	習得した方法に基づいて、安全で効果的にEATを実践することができる。	習得した方法だけでなく、独自の方法を加味したり開発したり、安全で効果的なEATを実践することができる。クライアントの状況に合わせて、自在に内容をカスタマイズすることができる。
心理的安全性	特段の安全対策を講じていない。実践の中で困ることが起きることを想定していない。困った事態が起こった時には全く対応できない。	自分自身の対応力を越える事態に対して、少なくともそれを認識し、何らかの対応を取ることができる。	心理的安全性確保の必要性と重要性を認識しており、そのための対策を講じ、対応することができる。	心理的安全性の確保ができており、トラブル時には的確に対応できる。自分自身の対応力を越える場合の見極めが的確にでき、その場合は関係機関や他の専門家に繋ぐなどの適切な対応をすることができる。
自己理解	自分自身の内面について掘り下げて考えたことが無い。自分自身の心理的問題が解決していない、あるいはそれを自覚していない。	自分自身の内面について、ある程度の洞察ができていいる。自己の心理的問題を自覚しており、その解決に向けて具体的な取り組みを行っている。	自己の本質や性向を理解し、抱えている心理的問題については一定の解決がついている。	自己の本質や性向を十分に理解し、自己の心理的な問題を克服している。教育分析やスーパービジョン等を定期的に受けている。
協力・連携	困った時などに相談できる相手やネットワークがない。情報収集のための手段を持っていない。(あるいは、仕方が分からない。)	信頼できる相談相手やネットワークを構築しようとして必要と感じた場合に情報収集を行っている。	信頼できる相談相手やネットワークがある。継続的に情報収集を行っている。	同業および関連の他職種の人々との専門的なネットワークがある。学会等に所属し、定期的に研究発表や事例報告を行っている。
経営・マネジメント	活動の継続性や、それを支える経営的な問題について考えたことがない。	継続的な活動をめざして努力や工夫をしている。	有償無償を問わず、継続的に活動している。	継続的な活動を実現できており、活動を拡充する見通しもある。
基本理念・ミッション	基本的な理念やミッションが確立していない。それについて考えたことがない。	自分なりの理念やミッションを持っており、ある程度は言語化できている。	理念やミッションが確立しており、他者に明快に説明することができる。	確固とした理念やミッションを持ち、明快な言葉で言語化されている。他者に活動の目的や理想を伝えることができる。

及第点は存在しない。表3の表現からすると、レベル1が一つでもあれば実施に支障が出る可能性があり要改善である、という忠告にも捉えられるが、アーツセラピーについて教科書の知識がなくても、現場での積み重ねから自分流のノウハウを築いている事例もある。EAT ルーブリックが学校教育における成績評価のためのルーブリックとは異なることを踏まえ、誤解や齟齬が生じないように説明を付すなどの対策が必要である。

それゆえ、ひとまず「十分である」「努力が必要」といった言葉での評価尺度は設けず、順番も1から4という並びにしている。それであっても、アセスメント結果の点数が低ければ、自らの活動に自信をなくしてしまうリスクはある。このようなセルフアセスメントに不慣れであればなおさらである。可能な限りあらゆる EAT 実践者を想定し、これらツールを、すべての EAT 実践者と将来の EAT 実践者をエンパワーするものとなるよう、それぞれに課題をもった2種の EAT セルフアセスメントツールをどう組み合わせ使い分ければよいのか、その効果的な併用方法の模索が必要である。たとえば併用方法として考えられるのは、

- R**を「評価基準」として参照しながら S*でアセスメントする。
- R 単独でアセスメント後、S で具体的に改善点を検討する。
- S の各項目を検討材料としながら R でアセスメントする。

(*S=EAT アセスメントシート、**R=EAT ルーブリック)

などである。

我々での作業はここまでとし、ここから先は EAT 実践者らとともに進めていこう。数名の EAT 実践者に協力を得て予備調査を行い、セルフアセスメントツールを試用してもらおう。EAT 実践者が実際に使って感じたツールの使い勝手、メリット、デメリット等をフィードバックしてもらおう。それに基づいて①両ツールの内容と形式の改善を図り、②効果的なセルフアセスメントの方法を導出する。それと同時に、③活動の質の向上に対する効果を測り、④その有効性の検証方法を検討する。本稿では、一名のインフォーマントに対する予備調査を報告する。

4. 予備調査

今回の調査では、絵画教室活動の一環として EAT を実践しているインフォーマントに、アセスメントツールを試用してもらった後、インタビューを行い、フィードバックを受けた。その間に個人セッションの参与観察を実施した。

4.1. 予備調査の概要

〈インフォーマント：Aさん〉

50代，女性，Z市にて小～中学生対象の絵画教室を主宰，教室歴28年，うちEAT活動歴8年。調査時点での生徒数は地元の小～中学生111名，うち個人セッション（EAT）対象者は12名。

〈調査方法〉

プロセス1 2022年8月10日，通常の絵画教室の会場である地元の公民館にて面接。（調査者：石原）

Aさんの基本情報および活動内容，活動形態等についてヒアリング。ATASからは研究経緯と概要，今回の調査目的と方法を説明し，資料①～⑤を手渡す。3週間後のヒアリング調査に向けセルフアセスメントを実施してもらうように依頼した。

- ① 研究概要（図2，3が掲載されたもの）
- ② β版ハンドブック第6章の抜粋編集版
（セルフアセスメントの意図，ポイントの説明および構成要件を掲載）
- ③ EATアセスメントシート（図1）
- ④ EATループリック（表3）
- ⑤ レーダーチャート（図4）

セルフアセスメントは，ループリックの影響力を測ることをねらって，以下の手順で2回実施していただくよう依頼した。

1回目：S* 単独でアセスメント

→カテゴリーごとに平均値を出しレーダーチャートに記入⁽¹²⁾

※資料①の分類図やPAT・EAT・AE⁽¹³⁾の関係図で自分の活動がどのあたりに位置するか検討し，アセスメントの補助にしてもらうとよい旨を伝える。

2回目：R** を評価基準として参照しながらS*でアセスメント，以下1回目と同様（*S=EATアセスメントシート，**R=EATループリック）

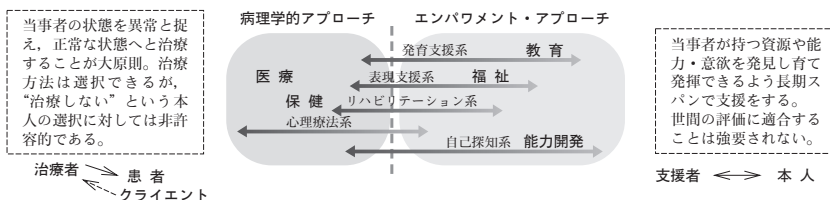


図2 日本におけるアーツセラピーの活動領域および5系統の相互関係

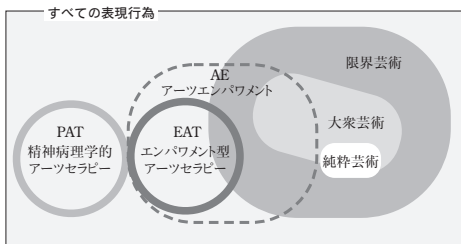


図3 アート/セラピー/エンパワメントの位置関係

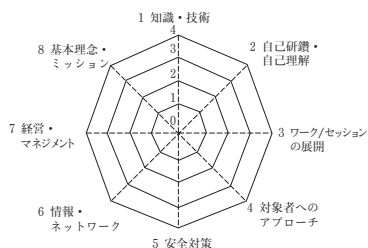


図4 レーダーチャート

また、ヒアリングから把握されたAさんの活動の経緯、方針、進め方は、次のとおりである。

- 絵画教室活動において、子ども達が家庭や学校では見せない言動を发出する様子、元気になっていく様子を見て、EATの有効性と必要性を実感する。EATに関連する講座・研修を受けたり、資格を取得したりして自主的に学習を重ね、EATの実践者として相応の経験と研鑽を積んでいく。
- 地域の福祉機関や心療内科とのネットワークも持つ。
- 団体の絵画教室は月3回、個人セッション（EAT）は月3回～年3回。
- 団体の絵画教室として開講しており、個人セッションの募集は行っていない。集団でやっていくのが難しい子、コミュニケーションに課題を抱えた子に対して個別セッションを案内し、希望があれば個別にEATを実施する。
- 相手に何か症状を見るのではなく、「元気がない」「言動が荒れている」「心を閉ざしている」「自己肯定感が低い、自己否定感が強い」といった状態の把握に努める。
- 一緒に絵を描く、一緒に物を造るという協働作業のなかで信頼関係を築き、安心して自分の気持ちや思いを表現できること、自信を持たせること、自己肯定感を高めることなどに徹する。Aさんいわく「指導者ではなく、ナビゲーター。全肯定してくれる変なおばちゃん」として関わる。ただしバランスが重要。肯定されるだけの状態もよくない。個々の性格や変化を見ながら対応する。
- 平常の教室活動も、基本的にEAT的な関わり方で進めている。
- 周囲に請われて絵を教えるようになったが、専門的美術教育を受けていないこともあり当初は材料費のみ徴収。規模の拡大に伴い、格安だが講師料を徴収するようになる。7年前に個人事業主となり、経営面が改善されて赤字は解消した。

以上より、AさんはEAT実践者の一つの典型と見なせる。

プロセス2 2022年8月30日、Aさん自宅アトリエにて個人セッションの参与観察。
(調査者：石原)

受講者は小6女子のBちゃん。小3で通い始めた当初は、自己否定的で全く話さず、他者をほとんど拒絶している状態であった。1年ほど経った頃より変化が見え始め、アトリエを通じて友人もでき、現在は外部世界（人・物）との関わりが良好になっている。今回は、夏休みの課題の絵画作品を仕上げるのがメインのため通常のセッションとは異なったが、上述のAさんのEATの方針、進め方を確認することができた。

○個人セッションの様子

今年は意欲的に2つのコンクールに応募するそうで、翌日の始業式に間に合うようBちゃんもAさんも全力で取り組んでいた。Aさんは、絵について、描かれる場面がどんな空気か、描かれる人物がどんな気持ちかなどをBちゃんに聞き、具体的にどんな絵にしたいか、そのためにはどう表現すればよいかを本人に考えさせながら進めていく。状況に応じ、より効果的な彩色や筆遣いなど、本人が表現したいと思っているものに近づけられるよう提案する。どうするかは本人が判断し、本人が主体となるよう「乗せ」ながら、ともに手を動かしていく。会話は絵のことに終始せず、何気ない日常のことから自分の内面を掘り下げるような内容まで、多岐にわたる。饒舌で語彙が豊富なBちゃんの姿に驚きを覚えた。

このアトリエでは、何を言っても否定されず、関心をもって反応してもらえる「安心して心を解放できる場」が醸成され、Aさんとの信頼関係ができていくことが了解される。Aさんによると、そのような「聴く力」「話す力」こそアーツセラピストとして求められるという。

プロセス3 2022年9月5日、Aさん自宅アトリエにて面接。

(調査者：石原・兼子)

活動内容およびセルフアセスメントの実施の様子および結果、意見・感想についてヒアリングを行った。

Aさんによる1回目（EATルーブリックなし）と2回目（あり）のアセスメント結果のレーダーチャートは、図5、図6のとおりである。この結果をもとにヒアリングを行ない、Aさんから次の意見を聴取できた（※以下EATアセスメントシート＝シート、EATルーブリック＝ルーブリックと略記）。

○EATルーブリック（評価基準）の意義について

①「ルーブリックの基準を参照しながらシートに回答する2回目の方法のほうが評価しやすかった。基準があることで評価の目的や、各レベルに求められるものが明確になる。（…）シートだけだと、自分のなかに軸となる基準がない状態で

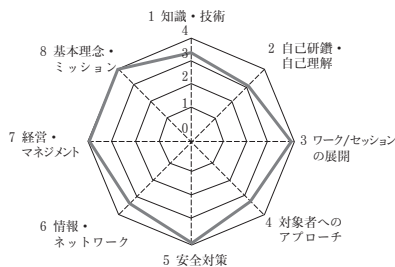


図5 アセスメント1回目
(Sのみで評価)

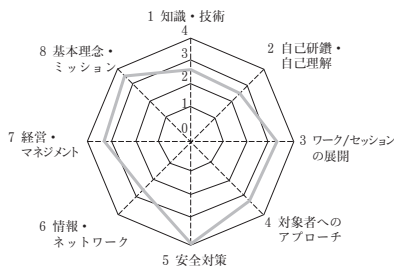


図6 アセスメント2回目
(S+Rで評価)

の評価になる。最高水準も最低水準も具体的に分からず自分の（経験等に依拠する）情報しかない。2回目で基準表を見たら、『あなた様はこういうことを求めておられるんですね！』と思って、自己評価の観点が変わった。基準を参照するかしないかで、これほど自己評価結果が違ってくることが興味深かった。」

②「EAT実践者は、自分の活動の位置づけが分からないなかで活動している人が多いと思う。ルーブリックを使いながらシートで自己評価することで、自分の立ち位置や活動に対する姿勢が明確になると感じる。」

○セルフアセスメント前の準備の必要性について

③「自己評価に入る前に、予め自分の主な活動領域や目的を確認できるようなプロセスがもっとあると、より良いかもしれない。（図2の）分類表は役に立った。自分はここに入るかな…と。」

④「活動歴の浅いEAT実践者の場合は、評価の仕方が分からなかったり、低評価になり自信をなくしてしまったりするかもしれない。セルフアセスメントの目的や方法について、丁寧な導入があった方がよい。」

○評価尺度について

⑤「4段階評価は、真ん中（普通・まあまあ）がないので、評価の際よく考える。5段階評価だと、迷ったら“3”をつけてしまいがちだが、4段階の場合はそれができない。特に、“2”と“3”の評価の場合、どちらに付けるべきか非常に考えた。」

○評価項目について

⑥（26項目のチェックは負担が大きくないかという質問に対し）「これくらいは多いと感じない。両面1枚で収まっていてよい。」

○セルフアセスメントを終えて

⑦「2回実施したあと、後日もう1回実施した。1, 2回目は一通りやった感じで、3回目はこれまでのことを振り返りながらゆっくり。そうすると、今に至る

までのいろいろな苦勞や工夫を思い出すことができ、今の状態を確認できる機会になった。」

以上のヒアリングより、我々のセルフアセスメントの目的と方法の設定の良し悪しが確認され、また今後の課題と改善に向けた示唆が得られた。

4.2. ヒアリング結果から得られた両ツールの可能性

まず、ヒアリングから見いだせる両ツールの意義と可能性、組み合わせ方、使い方の有効性を述べよう。

(1) セルフアセスメントによって自己の立ち位置や自分の活動姿勢を明確にする、という第一のねらいが達成される可能性が示された (①②③)。

(2) EAT ルーブリック (評価基準) の有無によって評価点が明らかに違い、2回目の方が厳しい結果であることは、Aさんの感想 (①) を裏付けている。つまり、アセスメントシートだけでは主観的になりやすい (Aさんの場合は甘くなりやすい) ことを示すと同時に、この問題点を、ルーブリックの導入によって解決するという方策が有効であることが示唆されている。

(3) 両ツールの使い方として、「EAT ルーブリックを共通の基準として参照しながらシートの26項目について自己評価・自己分析」という組み合わせであれば、量的負担はさほど多くはなく (⑥)、かつ判断における迷いが少なく、かつ客観的視点でのセルフアセスメントとなる可能性が示された (①②)。また、4段階評価にすることで、無難に中間地点の「まあまあ」を選べない状態に置かれ、より深い省察を促すことができる (⑤)。しかし、これは「2は不可、3は可」というインフォーマントの判断の表れである。次の課題 (2) で述べるように、この点については検討を要する。

(4) 共通の基準がある場合とない場合の結果を比較することが、自分の視点、自己評価の基準を客観視することに繋がる (①)。それによってセルフアセスメント能力も向上し、結果、自己改善の有効性と信頼性も向上する。ここから、1回目は基準なし、2回目は基準あり、という2段階のアセスメントプロセスが有効ではないかと考えられる。

EAT 活動におけるセルフアセスメントには、評価者と被評価者という直接的な二者関係は存在しないが、評価基準の共有というルーブリックの特性が有効に作用すると考えられる。自己をより正確に知ること、自分がめざすもの、改善すべき点、強みとなる点もより明確になるだろう。

4.3. ヒアリングから見える課題、ヒアリングにおける課題

次に、ヒアリングから抽出できる両ツールの課題と解決策、ヒアリング自体の改善すべき点を検討する。

○EAT アセスメントシート、EAT ルーブリックの課題

(1) Aさんには、EAT研究の経緯および調査目的、セルフアセスメントの方法を口頭で説明し、文書の形で提示したが、それでは不十分であることが明らかとなった。確かに、相手（EAT実践者）がこちらの意図をどれだけ理解してもらえるかは不透明であり、また、説明よりも主眼目のセルフアセスメント作業に意識が向くことも頷ける。今後、文書（ハンドブック）のみの説明でも十分に伝わるよう、改善が必要である。

「分類表が役立つ」という意見（③）を参考にすれば、セルフアセスメントに先立つ作業として、自分の位置を「5系統の関係図」（図1）および「PAT/EAT/AE関係図」（図2）にマッピングする作業をアセスメントのプロセスに組み込むことが改善策の一つとして考えられる。マッピングについては、関係図を活用すれば自己の立ち位置を可視化できる、と以前より提案していたものでもある⁽¹⁴⁾。そもそもマッピングするためには自分の活動を振り返る作業が必要であり、マッピング自体がセルフアセスメントの準備体操となろう。

(2) 評価尺度について「2は不可であり、3は合格ラインに達している」という意識が自ずと働いていることが読み取れる（⑤）。EAT活動において画一的な落第点や及第点はなく、自分の活動に必要なレベルを自分で判断してもらうよう、構成要件では明記してあるが、評価尺度自体が合否を意識させる状況を生んでいる。Aさんが懸念するように（④）、点数が低いことで自信を失わせる、すなわちデスパワーすることになるリスクがある。

この点は、共通のEATルーブリックとは別に、個々の実践者が自身のEAT活動に適合する自分仕様のルーブリックにカスタマイズするプロセスも提示することで、実践者の主体性と意欲を引き出すことができるのではないかと考える。また、リスク軽減には、課題（1）で検討しているマッピング作業も役立つと思われる。すなわち、予め自分の立ち位置をおよそ検討しておくことで、「それぞれの立場、それぞれのスタンスでのEAT活動に価値がある」ことが認識されやすくなり、このアセスメントが合否を問うものではないことが伝わるのではないかと期待される。

○ヒアリングに求められる改善点

(3) Aさんはすでに経験と実績があり、26項目のいずれについても、自分自身で必要性和必要度を判断し対策を講じてきた。このようないわば「出来上がった」インフォーマントの場合、ツールによってこれまでの振り返りと現状の点検がで

きる(7)以上に、どのように活動の質の向上につながるのか、予め検討が不十分であり、質問を深めることができなかった。そのため、当初の目的であった「③活動の質の向上に対する効果の測定」「④その有効性の検証方法の検討」には至らなかった。

1回の調査で③④の検討まで進めるのは難しいともいえる。Aさんには引き続き協力を得ながら、セルフアセスメントの効果の可能性を探り、有効性の検証方法、さらには、ツールの内容や使用法の改善・新たな用法の開発を協働して進め、他の実践者に対する予備調査のプロセスを練り直していきたい。

おわりに

2008年に KIHS がアーツセラピー研究に着手した際、市井のアーツセラピーの実態が全く分からず、適切な呼び方もなく、ただ混沌とした状態にあった。我々は KIHS の研究成果をベースに、この未開拓の対象についてそれこそ手探りで研究を進めてきた。「エンパワメント型アーツセラピー (EAT)」という定義をはじめ、5系統の分類や関係図を独自に考案・改定し提示してきた。今後さらに挑戦的な研究となるが、周囲を見回せば、参加型評価法やルーブリックなど、実際に即した実践的な研究があり、今回、その考え方や成果を参照・活用できることが分かり大きな推進力が得られた。また、この数年は難しかった実地調査も再開の目処が付き、新たな共同研究者も加え、本格的に調査を進められるようになった。現在は一名にとどまっている予備調査であるが、この一事例からすでに多くのフィードバックが得られ、躊躇なく次に駒を進められる状況といえる。今後、さらに EAT 実践者(調査研究協力者)達との連携強化を図りながら、まずは予備調査を拡大し、本調査に向けて取り組む予定である。

注

- (1) 研究の英語表記 [Arts Therapy Activities Study] の頭文字をとり、本研究を ATAS と称している。
- (2) ATAS の研究が開始された当時、状況がいまだ不明確で、一般的に流通していた「アートセラピー」を諸形式の総称として用いてきたが、2022年より正確を期して複数形の「アーツ」を採用することとした。日本においては「アートセラピー」が主に造形芸術を用いたものを指し、その状況が現在でも変わらない。英語圏でも art therapy は主に造形芸術(視覚的・触覚的)を用いるものを指し、arts therapy は音楽やダンスなど様々な媒体の therapy の総称として使われている。日本でも「アーツ・アンド・クラフツ」「アーツカウンスル」など意図的に複数形の「アーツ」が使用され、流通していることから、「アーツセラピー」も躊躇なく使用できると

投稿論文

考える。

- (3) JSPS 科学研究費・挑戦的萌芽研究24653153, 2012-14年度, 研究代表者・兼子一。
研究内容および成果報告については本研究のウェブサイト：<http://i.kinwu.ac.jp>,
にて公開している。また, 石原みどり・兼子一「エンパワメントとしての市井の
アートセラピー活動：全国実態調査から見えるその内発性と自律性」『心の危機と
臨床の知』vol. 16s, 甲南大学人間科学研究所, 2015年, pp 105-130を参照。
- (4) JSPS 科学研究費・挑戦的萌芽研究15K13105, 2015-17年度, 同代表。
- (5) 兼子一「『エンパワメント型アートセラピー』の構成要件と評価方法：その目的と
方法, 活用の可能性を考える』第47回日本芸術療法学会(2017年10月8日, 於目白
大学)にて口頭発表。
- (6) 三好皓一・田中弥生「参加型評価の将来性—参加型評価の概念と実践についての一
考察—」『日本評価研究』, 日本評価学会, 第1巻第1号2001年, pp. 65-79.
- (7) 鎌田倫子ほか「エンパワメント評価の可能性と限界—原理と特徴より—」『富山大
学杉谷キャンパス一般教』38号, 2010年, pp. 55-70.
- (8) 前掲書 p. 70.
- (9) たとえば山田容『ワークブック 社会福祉援助技術演習①対人援助の基礎』, ミネル
ヴァ書房, 2012年, 第12刷(初版2003年)の冒頭, 第1編(pp. 11-40)が「自己
覚知」に充てられ, 自己洞察・自己覚知の意義の説明およびいくつかの実践ワーク
が掲載されている。
- (10) ダネル・スティーブンス, アントニア・レビ『大学教員のためのルーブリック評価
入門』井上敏憲, 俣野秀典訳, 玉川大学出版部, 2014年, pp. 2-12.
- (11) 寺嶋浩介・林朋美「ルーブリックの構築により自己評価を促す問題解決学習の開
発」『京都大学高等教育研究』第12号, 2006年, pp. 63-71.
- (12) セルフアセスメントの4段階評価で用いている尺度は順序尺度となるため, 本来,
統計学的には平均値を出せない。今回あえて平均値を出してそのカテゴリーの評価
点としたのは, 社会心理学的な検査手法である職業適性検査や性格検査の数値化の
事例に倣ったものである。これらの検査では順序尺度を間隔尺度と見做して数値化
しており, その長所は, ランキングなどで自己の社会的位置を概観的にすぐさま把
握できる点にある。EAT実践者が自分の状態を知るうえで, わかりやすさ・簡便
さが重要であり, このような評価法は妥当であると判断している。ただし, 妥当性
については検討の余地が残されており, 数値化によってEAT活動の質が向上する
ことを検証する必要がある。
- (13) AE (Arts Empowerment: アーツエンパワメント) とは, エンパワメント的要素を
含んだ, あるいはエンパワメントを目的としたアート作品やアート活動全般を指す。
AEについては, 石原みどり「日常に根ざすアートセラピー」『a+a 美学研究』大
阪大学美学研究室, vol. 10, 2017年, pp. 103-107. および, 石原みどり・兼子一

「エンパワメント型アートセラピー研究の現在」『心の危機と臨床の知』vol. 20, 甲南大学人間科学研究所, 2019年, pp. 32-37 を参照。

(14) 前註に同じ。

(いしはら・みどり／美学・芸術学)

(こむら・みち／芸術療法・芸術学)

(はやし・あきひろ／情報工学)

(かねこ・はじめ／社会学)